

中世城館から見る大友氏の領国支配

— 「切寄」を事例として —

吉本明弘

はじめに

戦国末期、大友氏領国内において史料上に中世城館に關係して「切寄」（キリヨセ）と称される用語が見られるようになる。筆者の疑問点は、主に戦国期に城的な意味で使用される中世城館に關係する用語が、戦国大名の領国内において如何なる意味合いを持つのか、というところにある。このことから「切寄」が大友氏領国内において、大友氏の領国支配、あるいは在地と如何なる關係にあつたのかを説明していくことを目的とする。

「切寄」について論じる前に、文献史学を中心とした中世城館研究をまとめることとする。中世城館研究は長い歴史があるが、現在における歴史学研究としての中世城館の研究は一九八〇年の村田修三氏の研究から始まり、その前身として『日本城郭大系』（新人物往来社、一九七九〜八一年）がある。それにより城館研究が文献史学・考古学・歴史地理学といった多分野でのアプローチによって發展してきているが、とりわけ、『日本城郭大系』（別巻一、一九八一年）の論集に収められている阿蘇品保夫氏の研究は興味深い。阿蘇品氏は九州において史料上に見られる城館關係の用語一つ一つに着目している。ここでは概略に止まっているものも多いが、このような視点は、従来の縄張り研究を中心とした城館研究に新たな方向を打ち出したといえる。

現在においても縄張り研究は絶えず城館研究の主流を成しているのだが、阿蘇品氏以来、史料上に見られる城館用語に着目した研究もまた増えてきている。「切寄」の研究もそのような動きの中で現れ、阿蘇品氏が始めて着目し、乙咩政巳氏はさらに論を進めている^③。大分県内を事例に挙げると、近年では三重野誠氏が戦国大名(特に大内氏・大友氏)の城郭整備令としての「城誘」に着目し戦国大名権力の領国支配の実態に迫っている^④。また、大分県以外においても九州南部(島津氏領国内)で戦国期に城館用語として「柵」(カコイ)と称されるものが頻出するようになり、若山浩章氏が着目している^⑤。

「切寄」に関する二人の研究をまとめると、阿蘇品氏の論は乙咩氏の論文にもまとめられているのだが、ここで改めて述べることにする。

切寄を城郭の一種と考えたのが阿蘇品氏で、切寄は敵の攻撃の対象となっている特定の地を指し、人工の土壇や切り落とし土塁を持つ構築物としている。宇佐郡の四日市切寄に代表されるように、同族連合の形で切寄の戦力が構成され、そのほかに他姓の寄合衆も加わり、さらに大友氏より奉行が派遣されることもある。そのような切寄の戦略的役割は在地の連絡や補給の確保・日常的な郡内防衛の拠点とされている。分布は豊前国宇佐郡・下毛郡が中心で、豊後国では国東郡に一例を見出すだけであるとしているが、比定地が未詳になっているものも多い。史料上での検出年代は天正七年(一五七九)から天正十五年(一五八七)で、天正六年の耳川合戦以来、衰退の傾向をたどる大友領国の中で、豊前地方の方分(地方司令官)であった田原紹忍が領域内反乱抑止・外敵奇襲に対処するため、本領確保指向の強い在地領主たちの希望を利用する形で切寄という語が生まれたと推測している。

乙咩氏の論は阿蘇品氏に批判的な内容である。乙咩氏は史料(田北学編『増補訂正編年大友史料』)上から「切寄」の分布を豊前・豊後・筑前に見られるとし、また「切寄」の出現時期を地名に見られる福岡県田河郡の例を挙げ、田河郡は天正七年以降反大友勢力の拠点で、大友氏の入る余地は全くありえないとし、天正七年以前の大友氏が豊前国の安定的に支配していた時点に求めており、文書発給者は大友氏が多いことからして、大友氏が在地領主の城郭を指して命名したものと考えている。史

料の検出数や地名の残存も調査したことで、阿蘇品氏に比べると「切寄」の数も増大したのであるが、乙咩氏の挙げた「切寄」の一覧にはまだ不十分な点もある。そこで改めて史料や地名といったものを細かく拾い上げ、検討を加えることで、阿蘇品氏や乙咩氏の論を再考察していくこととする。

また最終的に史料上に見られる城館用語が戦国大名の領国支配とどのように関連してくるのかということ、島津氏領国に見られる「柵」（カコイ）と比較検討して考察していくこととする。

一、「切寄」の出現

(一) 大友氏と在地との関係

史料上における「切寄」の検出時期は阿蘇品氏や乙咩氏の研究にあるように天正七年（一五七九）から同十五年（一五八七）である。管見の限りでは、現在の大分県内において二二一点、福岡県で六点である。その分布は豊前国では宇佐郡・下毛郡、豊後国では国東半島・由布院・宇目に、その他では筑前国に分布している。また江戸時代の地誌類では豊後国の大野郡・直入郷に集中しており、明治時代の地名では豊前国田河郡にも見られ、また肥後国や肥前国にも一カ所ずつ見られる。その他では現在の城館調査における報告書^⑤の中にも当該期の史料と重複するもの以外では宇佐郡や日向国に一カ所ずつ確認できる。また「豊州城堡記」（別府大学所蔵、『大分の中世城館』第二集 文献史料編2（大分県教育委員会、二〇〇三年）に所収）に宇佐郡内において五カ所見られる。以上が筆者の管見の限り検出できる「切寄」であり、〔表1〕に史料検出の年代別に分けた一覧を載せ、分布図を最後に付け加えた。

前述したように阿蘇品氏は「切寄」の出現を天正六年の耳川合戦以降における大友領国の混乱期に求めているのに対し、乙咩氏は地名の残存から、大友氏が領国を安定的に支配していた時点に求めている。また阿蘇品氏は田原紹忍と在地領主との間のやり取りで「切寄」という語が生まれたと推測しているのに対し、乙咩氏は大友氏が在地領主の城郭を指して命名したとし

【表1】「切寄」の年代別分布一覧(天正7~15年)

	切 寄 名	国 名	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	年未詳
1	賀来安芸守切寄	豊前(下毛郡)	○	○	○							
2	福嶋佐渡守切寄	〃 (〃)		○								
3	万田切寄	〃 (〃)					○					
4	是則切寄	〃 (〃)					○					
5	切寄(成恒越中守に関連)	〃 (〃)		○								
6	(成恒)統直切寄	〃 (〃)			○							
7	築地切寄	〃 (〃)		○	○							
8	雀尾切寄	〃 (〃)					○					
9	佐野切寄	〃 (〃)					○					
10	四日市切寄	〃 (宇佐郡)		○				○				
11	時枝切寄	〃 (〃)		○		○		○				
12	西来・佐井木切寄	〃 (〃)		○								
13	尾長居切寄	〃 (〃)		○		○						
14	安福寺切寄	〃 (〃)		○								
15	高家切寄	〃 (〃)		○								
16	切寄(赤尾三宅入道に関連)	〃 (〃)		○								
17	敷田(両切寄)	〃 (〃)					○					
18	佐野切寄	〃 (〃)					○	○				
19	元重切寄	〃 (〃)		○						○		
20	阿波甲斐入道切寄	〃 (〃)										○
21	須賀切寄	〃 (〃)										○
22	其元切寄(廣崎氏に関連)	〃 (〃)										○
23	当切寄(中島主殿助に関連)	〃 (〃)					○					
24	惣勘切寄	〃 (〃)			○							○
25	中山左近助切寄	〃 (〃)			○							
26	安心院中務入道切寄	〃 (〃)				○						
27	築地村切寄	豊後(国東郡)		○								
28	赤松之村切寄	〃 (〃)		○								
29	福寿院切寄	〃 (〃)		○								
30	安岐・安岐郷切寄	〃 (〃)		○								
31	当切寄(田代氏に関連)	〃 (〃)		○								
32	当切寄(片山氏に関連)	〃 (〃)		○								
33	切寄(丸山氏に関連)	〃 (〃)		○								
34	宇目村(切寄)	〃 (大野郡)						○				
35	宮尾切寄	〃 (由布院)								○		
36	畑切寄	〃 (〃)									○	
37	吉川庄切寄	筑前(鞍手郡)			○							
38	小石原切寄	〃 (上座郡)				○						
39	松尾切寄	〃 (〃)				○						○
40	山田切寄	〃 (粕屋郡)										○
41	久邊野切寄	〃 (那珂郡)										○
42	若松切寄	〃 (遠賀郡)								○		

ている。この両者の見解の違いから「切寄」の出現を見ていきたい。

地名の残存でいけば肥前国にも一ヶ所確認できる。大友氏は義鎮(宗麟)の代に肥前国の守護職も兼ねていたが、当地域では龍造寺氏との抗争に敗れたことで元龜・天正年間(耳川合戦以前)に勢力を失っていく。イエズス会関係史料(松田毅一訳、フロイス『日本史』・『十六・七世紀 イエズス会日本報告集』)でも、当時の宣教師は大友宗麟を九州五カ国(豊後・豊前・筑後・筑前・肥後国)の太守として認識しており、肥前国では有馬氏が国主として、そこに龍造寺氏が侵入してきたとしている。大友氏が関係する城は天正七年以前からあるが、「切寄」という語自体はどのような時期に出現してきたのであろうか。そのことを解明するために当該期の史料から検討していくこととする。

当該期の史料上における「切寄」の初見は、天正七年十一月一日成恒越中守(鎮直)宛ての田原親家感状で、「仍去冬以来總乱不及是非候、従最前、至賀来安芸守切寄差籠、別而被励軍忠之通、無比類候」とある。同年十月に下毛郡で悪党(在地の反大友勢力)が反乱を起こしている。そのことで賀来安芸守切寄に差籠り、軍忠に励んだことに對し、田原親家が成恒鎮直に感状を出している。同年十二月廿七日賀来安芸守宛の田原親家書状では、「雖今度悪党現形候、其方事以順儀之覚悟、切寄取誘、堅固被相支候」とある。ここでは下毛郡で起きた在地の反大友勢力の反乱により、切寄の「取誘」というかたちで、在地領主の既存の城を整備させ、備えを堅固にした。このように下毛郡において在地の反大友勢力の反乱との関係で「切寄」という語が史料上に頻出する。

つぎに下毛郡以外に「切寄」が多数見られる宇佐郡や国東郡を見ていくこととする。宇佐郡では、「四日市切寄」が早くから見られる。(天正八年)正月廿三日小田原左京亮(鎮郷)宛ての大友義統書状に、「到今度豊前表四日市切寄、為檢使、差遣候之処、長々遂在陣、別而被励粉骨、被疵之段、連々之覚悟、令顕然候」とある。大友義統は小田原鎮郷を檢使として四日市切寄に派遣している。この檢使の派遣には天正七年十二月に勃発した国東での田原親貫の蜂起が関わっている。天正八年九月廿日の大友義統感状には、「去年以来於当切寄(四日市切寄)、別而被励粉骨」とあることから、四日市切寄は天正七年の段階から

存在していた。これらことから国東郡における田原親貫の蜂起が多分に関係して「切寄」なる語が確認できる。(天正八年)三月廿四日津崎兵庫助(鎮兼)宛ての田原親家感状案に、「今度両郷宗徒之諸士構未練、重々逆乱之跡、不及是非候、就夫到赤松(之)村、切寄取誘、悪党楯籠之条、可討果之通」とある。田原親貫の蜂起によって、「両郷(安岐郷・国東郷)宗徒之諸士」が「赤松之村」(現国東町)に切寄を取誘らえて楯籠ったことで、切寄に籠城した者たちを討ら果たしたことに對して感状を出している。

大友氏が天正六年の日向高城合戦(耳川合戦)に敗北して以降、大友氏領国内においてまず田原親宏(宗龜)が反乱を起し、豊前の在地勢力も大友氏から離反していき、田原宗龜の養子親貫も国東で蜂起することになり、大友宗麟によって豊前掌握が確立していたものが、龍造寺隆信の筑後・筑前侵攻、大内氏滅亡後の豊前における毛利氏との関係、それによる在地の反大友化といったことで、九州北部は諸勢力が入り乱れ、情勢が悪化していくことになる。大友氏は九州北部において大内・毛利・龍造寺といった他国の戦国大名との抗争の中で領国支配を確立してきた。しかし、天正六年の日向高城合戦の敗北により、掌握が確立していた征服地においても在地領主の中に反大友氏の動きが出てくる。大友氏の本国に隣接する宇佐郡や下毛郡の在地勢力も反大友化の動きを見せ、国東での田原氏(宗龜・親貫)の反乱により、宇佐郡や下毛郡あるいは国東半島という地域は諸勢力の境目地域となり、在地領主は自立化の動きをより一層強めることとなる。そのような不安定な情勢の中で、「切寄」という語が史料上に見られるようになる。

以上のことから、「切寄」は日向高城合戦以降における大友領国内の混乱期において新たに出現した用語であるといえる。軍事的緊張が高まる中、在地領主の自立化の動きが強い下毛・宇佐・国東郡において、在地領主の既存の城ないし新たに在地領主が構築した城を、大友氏は「切寄」と呼ばれる語でもって認定し、再編を図ろうとしたと考えられる。その下に宇佐・国東支配のために送り込まれた田原紹忍や親家も使用するようになり、田原親貫のように大友氏に反した勢力も使用するようになった。天正七年十二月から同十五年一月という短期間において、特に前半期に集中して切寄関係の史料が頻出するのこ

のような軍事的緊張関係が生じたためであろう。

(二) 他国の戦国大名との関係

天正九年以降、「切寄」は筑前国にも確認できる。筑前に切寄が見られる時期は二つに分けられる。一つは龍造寺隆信の侵攻とそれによる在地の大友氏への反乱が起った時期、一つは島津氏の九州北部侵攻の時期である。この二つの時期に「切寄」が見られるということは、大友氏と在地勢力との抗争だけでなく、外敵の侵攻防止策としても「切寄」が捉えられるようになったのではなからうか。在地勢力との関係では、宗像大社の大宮司職である宗像氏貞が領国形成を進め、大友氏や立花氏と抗争を繰り返しており、吉川庄の切寄で宗像氏と立花氏が戦っている。また(天正十年)正月十六日の大友府蘭感状案に小石原表において「松尾切寄并町打崩候刻」とある。切寄だけでなく町も「打崩」という表現があることから、町自体も何らかの防禦的な機能を持っていたと思われ、切寄が町も含む惣構的な意味も含まれていたと考えられる。

『上井覚兼日記』によると天正十四年(一五八六)に立花宗茂が筑前国遠賀郡の若松切寄を攻め取ったという記載がある。島津氏の家臣にも「切寄」という認識があり、大友方の立花宗茂が切寄を攻め取っているということは、当地域の城を大友氏が「切寄」とし、島津氏侵攻の際に攻め取られていたのを、立花宗茂が奪い返したのである。このように「切寄」は外敵(主に島津氏)との境目にも存在した。

大友氏の外敵との境目への意識の現われとしても「切寄」が存在し得た理由として、筑前国以外にも大友氏の本国である豊後国の宇目や由布院にも見られることが挙げられる。宇目の場合は天正十三年十二月に島津氏に備えて確認でき、由布院は天正十四年十二月から翌十五年正月の島津氏の豊後侵攻時に確認できる。

大友宗麟は天正十三年に島津氏対策として志賀道輝を宇目に派遣し、道輝は当地域の諸切寄を点検している。宇目は日向国との境にある要衝の地である。そこで諸切寄を点検していることは、切寄が島津軍に備えての境目への対策であったことが窺える。しかし、当該期の史料上での「切寄」の分布は豊後北部以北に集中しており、史料では一点だけ豊後南部の宇目に見ら

れる。この切寄は「切寄所柄等被見合」とあるのみで、宇目のどこにあつたのかは不明であるが、宇目村における諸城を「切寄」と称していたとも考えられる。

切寄の分布を見ると、豊後本国の大友氏の政治・経済拠点である府内・臼杵一帯には見られない。豊後から豊前を通つて筑前へ抜ける地域、豊後から宇目のように日向との境目、由布院のように筑後・肥後へと通じる地域に見られる。宇佐・下毛・国東という不安定地域に多数見られることや大友氏の外敵防止策として、境目地域への対策の中で「切寄」という語が現れたことが、豊後府内・臼杵一帯に切寄が見られない理由でもあると思われる。

二、「切寄」の性格と構造

(一) 在地領主と「切寄」

「切寄」は宇佐郡・下毛郡・国東郡を中心として見られる。その「切寄」を、「取誘」の主体や「切寄」に籠城した在地領主をまとめると次の【表2】のようになる。

【表2】下毛・宇佐・国東郡の「切寄」

(下毛郡)

「賀来安芸守切寄」(大畑城)：大友氏から検使の派遣。

賀来安芸守が「取誘」。賀来氏(在地土豪層)。文書発給者：田原親家・大友義統。

成恒越中守鎮直が「差籠」・「籠城」。成恒氏(在地土豪層)。文書発給者：田原親家。

蠣瀬次郎統忠が「籠城」。文書発給者：大友義統。

「福嶋佐渡守切寄」(田丸城)

「切寄」(成恒越中守に關連)(田島崎城)

〔統直(成恒統直)切寄〕(田嶋崎城)

〔築地両切寄・築地切寄〕…成恒鎮直が「籠城」。文書発給者…野仲鎮兼。

〔万田切寄〕…到津治部少輔(宇佐大宮司職)の居城。到津氏側の城督に廣津式部大輔。

〔是則切寄〕…秋月氏側。

〔雀尾切寄〕

〔佐野切寄〕

(宇佐郡)

〔四日市切寄〕…大友氏から検使・奉行の派遣。

渡邊氏一族(在地土豪層)が「取誘」。文書発給者…大友義統。

城出雲守が「差籠」。文書発給者…大友義統。

大神中務少輔・林嘉右衛門尉が「差籠」。文書発給者…大友義統。

〔尾長居切寄・おなかいの切寄〕…津崎兵庫助鎮兼が勤番。文書発給者…田原親家。

渡邊氏一族が「差籠」。文書発給者…大友義統。

竹田津式部少輔が「差籠」。竹田津氏(国東郡衆(浦部衆)、田原氏の有力被官)。文書発給者…大友義統。

清成式部少輔が「滞在」。文書発給者…宗勇。

〔安福寺到切寄〕

〔高家切寄〕…中島伊予守(宇佐郡衆)の居城。中島伊予守が「差籠」。文書発給者…大友義統。

〔切寄〕(赤尾三宅入道に關連)(光岡城)…赤尾氏(宇佐郡内の有力領主)。文書発給者…大友円齋。

〔敷田至両切寄〕

〔阿波甲斐入道切寄〕…吉村民部丞が「差籠」。文書発給者…田原紹忍。

「須賀切寄」…吉村民部丞が「差籠」。文書発給者：田原紹忍。

「惣勘切寄」…飯田内記允麟清が「差籠」。文書発給者：田原紹忍。

「中山左近助切寄」…廣崎中務丞・廣崎兵庫入道が普請。文書発給者：田原紹忍。

「元重切寄」…元重安芸守(宇佐郡衆)が「誘持」^(マ)。元重兵部丞。文書発給者：田原紹忍・大友義統

「其元切寄」(廣崎氏に關連)…廣崎宗善。文書発給者：佐田鎮綱。

「当切寄」(中島主殿助に關連) 文書発給者：田原紹忍。

「時枝切寄」…時枝氏(宇佐郡衆、宇佐宮社家)。

「西来切寄・佐井木切寄」

「佐野切寄」…佐野氏(宇佐氏一族)。

「安心院中務入道切寄」

(国東郡)

「築地村切寄」…飯田但馬入道麟清が名代勤番。文書発給者：大友義統。

「切寄」(丸山氏に關連)…丸山外記允・三郎左衛門尉(在地土豪層)、「切寄之口」^(衆力)。文書発給者：田原親家。

「福寿院切寄」…片山越後守が攻める。文書発給者：田原親貫。

「当切寄」(田代氏に關連)…田代出雲守(在地土豪層)、「当切寄衆」。田原親貫側→大友側。文書発給者：田原親家。

「当切寄」(片山氏に關連)…片山越後守・内記兵衛(在地土豪層)、「当切寄衆(衆中)」。田原親貫側→大友側。文書発給者：田原親家。

田原親家。

「赤松之村切寄」…「兩郷(安岐郷・国東郷)宗徒之諸士」が「取誘」、「差籠」。

「安岐切寄・安岐郷切寄」(安岐城)

在地領主の名前に付随し、在地領主個人の「切寄」（持城）といえるものに、「賀来安芸守切寄」・「福嶋佐渡守切寄」・「統直（成恒統直）切寄」・「阿波甲斐入道切寄」・「中山左近助切寄」・「安心院中務入道切寄」が挙げられる。個人名に付随していないが「其元切寄」や「当切寄」というような形で在地領主に關係している切寄もある。他は「万田切寄」・「是則切寄」・「雀尾切寄」・「佐野切寄」（下毛郡・宇佐郡）・「四日市切寄」・「尾長居切寄」・「高家切寄」・「元重切寄」・「時枝切寄」・「西来切寄」・「築地村切寄」・「赤松之村切寄」・「安岐切寄・安岐郷切寄」のように地名に付されているものや、「福寿院切寄」・「安福寺切寄」というように寺院に付されているものもある。文書発給者も大友義統・府蘭（円齋）・田原紹忍・田原親家・田原親貫・佐田鎮綱・宗勇と、大友氏や田原氏以外にも「切寄」という語を使用している。次項でこの表を元に「切寄」の性格や構造を大友氏の豊前支配と合わせて考察していくこととする。

(二) 大友氏の豊前支配（宇佐郡を中心として）

「切寄」が宇佐郡に多数存在していることから、「切寄」は中世最末期における宇佐郡を中心とした大友氏の豊前支配のあり方を考察するのに有効な材料となると思われる。

豊前国は戦国期に大内・大友・毛利の諸氏が交互に入り乱れ、最終的に大友氏が支配することとなる。この豊前支配において豊後・豊前の国境付近で交通の要衝ともなる妙見岳城において、大内・大友両氏は城郭整備令としての「城誘」を行うことで、妙見岳城を拠点として豊前支配を確立していった。¹⁹

宇佐郡における「切寄」は前述したように四日市切寄への検使の派遣が初見史料である。天正八年正月廿三日に大友義統は小田原鎮郷を検使として派遣し、長く在陣した忠節に感心し、豊筑間の五十町分を預け置き、知行を任せた。同日には城出雲守に、四日市切寄での防戦の功に対し、吉村掃部入道の跡地湖米田三町ならびに月代一町分を扶持せしめて知行を任せた。²⁰また大神中務少輔・林嘉右衛門尉も四日市切寄に籠る場合もあった。²¹大友氏からの検使の派遣は、その地における大友氏の直接的な地域支配の現われでもある。四日市切寄は阿蘇品氏も述べているように本来渡邊氏一族という同族連合の城であったが、

大友義統から検使の派遣という形をとったことから、私の城ではなく、大友家の支城としての性格を付与され、周辺の土豪衆も入る公的な城へ変化した。ここに四日市切寄は、妙見岳城とともに宇佐郡支配における重要な役割を負うことになったと考えられる。四日市に大友義統が検使を派遣した年の十月にも再度小田原鎮郷を奉行という形で派遣している。同じ時期に同じ人物に検使や奉行として派遣していることから、ここでの検使と奉行は同等と考えられる。また同年九月に大友義統は四日市切寄衆中（渡邊氏一族）に対して坪付を出し、宇佐郡内の「二所四十町 宮成跡」・「一所拾五町 益永跡」・「一所貳町語畝 辛嶋跡」という大友氏に敵対した勢力の跡地を与えている。四日市切寄が大友氏にとって重要な役割を担っていたからこそ、在り土豪層の中でも四日市切寄を構成する渡邊氏一族は、大友義統から直接書状や坪付が発給された。宇佐郡内において相次ぐ戦乱が起こったことで、四日市切寄は大友氏から重要視され、検使・奉行の派遣や渡邊氏一族以外も籠ることもあり、宇佐郡内における拠点の意味を持つようになった。妙見岳城と四日市切寄の関係は、防禦的な意味合いが強く、豊前国全体を見据えた場合の支配拠点として妙見岳城があり、より地域的な拠点として四日市切寄があつたといえる。

天正年間に入り宇佐郡内で四日市が史料上に見え始める頃から市が立ち商業が行われるようになったと思われ、四日市切寄と市町との関係を示す左記の二点の史料を挙げる。

①大友義統書状案

□□□□別而、忠意之次第、度々申出候、□□□□□□者、当切寄商売人諸方往反之刻、諸□□□□儀、従前々免許之趣、今以無相違候、為存□□□□□□言、
(知候恐々謹)

天正十二年

十一月廿八日

(大友)

義統 在判

四日市切寄中²⁾

大友義統が四日市切寄中(渡邊氏一族)に対して四日市切寄での商売人往反の際の何かを以前から免許している。

② 田原紹忍・田原親盛連署奉書

為折々軍勞之御感、当切寄商売人方々往反之刻、諸公事諸点役等之儀、永代被成 御免許之由、以御書被仰出候、尤珍重候、於何方茂、先立此旨可有沙汰事肝要候、恐々謹言、

天正十二年

十二月三日

四日市切寄衆中²⁾

(田原)
親盛(花押)
(田原)
紹忍(花押)

軍勞のことに対して四日市切寄での商売人往反の際の諸公事や諸点役等を永代免許し、このことは前にも沙汰があるということ、田原紹忍と息子親盛が大友義統の意を受けて四日市切寄衆中(渡邊氏一族)に宛てている。ここでの軍勞は田原親貫の蜂起や天正八年末から起こっている宇佐宮社家の相次ぐ離反などの軍事的問題が関係しているのであろう。

②の史料から①の商売人往反の際の諸公事や諸点役を免許していることが伺える。二点の史料をまとめると、①で以前から免許していた諸公事・諸点役等を②で追認している。ここに見られる「永代被成 御免許」とは、①の史料との関係上以前から永代免許されているものと考えられる。渡邊氏一族が商売人としても活動し、諸公事・諸点役等を免除されているので、宇佐郡の支配者である田原紹忍や親盛に公事等を払う必要はなく、渡邊氏一族は四日市切寄内の市町において自由に活動ができ

た。ここに見られる切寄は市町を含む形で存在しており、惣構的な意味も含まれるであろうと考えられる。検使や奉行の派遣、さらには市町との関係から、大友義統は四日市に比重を置き、切寄に重要な拠点の意味を持たせていたといえる。

渡邊氏一族は尾長居切寄にも差籠²⁰っており、竹田津式部少輔も渡邊氏一族と共に尾長居切寄に差籠²⁰っている。また津崎兵庫助が勤番を勤めていた時期もある。竹田津氏や津崎氏は田原氏の有力被官である。渡邊氏一族だけでなく田原氏の有力被官である竹田津氏も籠り、津崎氏は勤番として尾長居切寄にいるということは、宇佐郡内において四日市切寄に次ぐ拠点の意味合いもあつたのであろう。四日市切寄は大友氏の直接の拠点として、尾長居切寄は田原紹忍や親家の拠点として機能していたといえる。

惣構的な意味も含まれると思われるものに、宇佐郡内で広崎氏の切寄や安福寺切寄を挙げることができる。広崎氏の切寄は『大分の中世城館 第三集 地名表・分布図編』（大分県教育委員会 二〇〇三年）によると、「屋敷地名を持つ長方形の区画が連続する。一部土塁・堀が認められる。集落全体が「切寄」か」と記されている。また安福寺切寄は現在宇佐市に安福寺があるが、当時の場所は不明である。寺院に付して切寄が見られることから寺院自体が防御的機能も備えていた。このように集落や寺院との関係からも惣構的な意味を持っていたと思われる。

下毛郡では、賀来安芸守切寄（大畑城）に成恒氏や蠣瀬氏も籠っている。また、この切寄には大友義統から検使も派遣されており、下毛郡における反乱鎮圧の拠点となっていた。また国東郡では築地村切寄に飯田但馬入道麟清が名代勤として入り、反乱の対処にあたっている。他の在地領主も籠るものに、宇佐郡の阿波甲斐入道切寄・須賀切寄・惣勘切寄があり、中山左近助切寄には廣崎氏が普請を行っている。他の在地領主が籠り、普請を行うこともあることから、四日市切寄で確認したように大友氏は、在地領主の城を「切寄」に認定し、公的性格を付与し、宇佐郡支配の拠点妙見岳城の機能を補完する出城に編成したといえる。

以上のように大友氏の豊前支配の中において切寄が関連してくるものには、田原親貫の蜂起や宇佐宮社家の離反が多分に関わり、四日市切寄や賀来安芸守切寄、また国東郡の築地村切寄に比重を置き、また四日市切寄に次いで拠点の意味を田原紹忍や親家は尾長居切寄に持たせている。大友氏の豊前支配には、反乱鎮圧に田原親家を、そして妙見岳城と四日市切寄や賀来安芸守切寄を地域的拠点として、豊前国方分である田原紹忍をもって領国支配にあたり、妙見岳城を中心にして地域拠点としての「切寄」、さらに他の切寄が周辺を固め、大友氏は切寄間で在地領主を移動させるようなかたちで、「切寄」編成が行われた。

三、戦国大名の領国支配と中世城館（「切寄」と「柵」の比較から）

本節では、はじめに述べたように、主に九州南部（島津氏領国内）で見られる「柵」についても触れ、中世城館に関係する用語が戦国大名の領国支配と如何なる関係にあるのか、ということについて、「切寄」と「柵」について比較することで検討していくこととする。

（一）「柵」について

戦国期九州南部を中心とした島津氏領国内において史料上の城館用語に「柵」（カコイ）と称されるものが多数見られる。また現在でも地名や人の姓に多数残っている。

史料上の検出時期は「切寄」の出現よりも時代がさかのほり、大永六年（一五二六）から見え始め、下限は天正十五年である。この時期の島津氏とその領国内の主な動向を整理すると、①大永年間から天文年間にかけて、薩摩・大隅・日向三カ国の守護職継承を巡って島津忠良・貴久（一五代当主）父子、勝久（一四代当主）、実久（薩州家当主）の三者による抗争、それによる被官層の所属の度重なる入れ替わり、②弘治年間から天正年間前半にかけて、島津貴久・義久と肝付氏・蒲生氏・入来院氏等の国人層との対立、③天正五年、島津義久による薩摩・大隅・日向三カ国統一（いわゆる三州統一）、天正六年の日向高城合戦の勝利、④天正年間後半、肥後国から九州北部への侵攻、⑤天正十四年から十五年にかけて、豊後国侵攻と豊臣秀吉の九州征伐、

となる。

①の時期において島津忠良・貴久側の元に設けられた軍事施設であり、②の時期に島津貴久・義久によって大隅の国人勢力に対する拠点となつていった。すなわち三者鼎立期から三州統一へ向けて一族間ならびに国人層・在地土豪層との抗争の中における重要拠点として「柵」が出現してきたのである。この「柵」の分布は史料上では薩摩・大隅・日向南部を中心に広く多数存在し、また肥後や筑前・豊後にも見られる。現在の中世城館調査における報告書中³⁰にある城名として見られる柵や曲輪としての柵は鹿児島県川内市とその周辺(薩摩国千台(川内)・入来院)・同県志布志町(日向国)・宮崎県都城市・飫肥町(日向国)に多数見られる。地名や人の姓としても鹿児島県に多数残存し、熊本県南部にも幾つか地名で残存している。

柵の機能としては、支城・出城・曲輪・惣構的なもの(本城を取り囲む形や町・集落をも囲む形でも存在)・島津氏による境目対策というように多種多様な機能を有する。島津貴久が柵で年を越したという記録も見られることから、本城的な役割も果たしていた³²。島津氏は元々敵勢力であつた国人層に城領を宛行つたり柵に付したりして、また元々敵勢力であつた在地土豪層には柵の勤番を任せたりして、戦国期島津氏特有の政策である地頭制との関連からこのような国人層や在地土豪層への掌握・編成のためにも「柵」が存在した。

島津氏は三州統一以降、肥後から九州北部への侵攻にともなつて、柵も肥後・筑前・豊後国に見られるようになる。これらは『上井寛兼日記』を中心とした島津方の史料でしか確認できない。すなわち島津方の認識にのみ「柵」が存在し、島津氏が攻め落とした順に「柵」という名称が使用されていったと考えられる。そして豊後侵攻にともなつて見られるのを最後に、豊臣秀吉の九州征伐以降確認できなくなる。

本来「囲む」ことを意味する柵は秀吉の九州南下時にも機能を有し得た。薩摩国千台(川内)地方(平佐城周辺)、日向国志布志城周辺、同日向国都城周辺に柵が多数存在し、また本国である薩摩国鹿児島には確認できない。柵には国境地域において鹿児島³³の地を取り囲み防禦する意味も含まれていたのであろう。川内地方は秀吉との攻防の最終地となり、平佐城での攻防の最

中に島津義久が秀吉に降伏している。また川内地方や志布志・都城一帯は領国支配・経営上、また海陸における交通の面でも重要拠点となる。このような地域に柵が多数見られることは、これらの地域では、柵とその関連城郭をもって平佐城・志布志城・都城を核とした当地域での防衛ラインが、秀吉の九州南下時以外でも随時形成されていたことがいえる。

(二)「切寄」と「柵」の比較

「切寄」と「柵」は出現時期に差があるものの、ともに戦国期大友氏・島津氏それぞれの領国内での動乱が激化した時期に史料上に見え始める。また両方とも豊臣秀吉の九州征伐を契機として史料上から見られなくなる。秀吉の九州征伐が九州における近世社会への移行であり、九州の城郭史上においても中近世移行期における転換期であるといえる。

軍事的緊張関係の中から生まれてきた用語であり、戦国大名である大友氏や島津氏とそれぞれの被官層や国人・在地土豪層との関係の中に「切寄」や「柵」が重要視されていき、境目地域への対策の強化として、大友氏や島津氏の下に使用された。戦国大名本国の中心部(大友氏領国では豊後国府内・臼杵、島津氏領国では薩摩国鹿児島)には「切寄」・「柵」ともに存在せず、また境目地域における最重要拠点城郭(大友氏領国では豊前国妙見岳城、島津氏領国では薩摩国平佐城、日向国都城・志布志城)を中心として、さらに交通の面も意識した防衛ラインを形成していた。

戦国末期、「切寄」は妙見岳城を中心にその周辺を固めるために、大友氏による城郭編成の一つとして使用され、島津氏領国内における「柵」も同様に主要城郭を中心に周辺を固め役割を果たし、島津氏による城郭編成の一つであった。中世城館に付随する特殊な用語は、境目防衛や在地領主・郡衆や土豪層(再編の意味を込めた軍事編成の一つ)として行われ、大友氏による「切寄」政策、島津氏による「柵」政策であったといえる。

おわりに

以上のように、「切寄」について当該期の史料を中心に検討し考察を行ってきた。以下、明らかになった点をまとめていく

こととする。

「切寄」は天正六年の日向高城合戦(耳川合戦)以降の大友氏領国の混乱期において、大内氏滅亡後の毛利氏や龍造寺氏といった勢力との関係、それによる在地の反大友化の中で、境目地域となる宇佐郡や下毛郡あるいは大友氏本国における豊後国の内乱が勃発した国東半島での在地領主が自立化の動きを強める中で、在地領主の既存の城ないし新たに在地領主が構築した城を、大友氏が「切寄」という語でもって認定し、天正七年から同十五年という短期間で使用された。

元々豊前国では大内氏と在地領主との関係が強いことから、宇佐郡でも反大友勢力が多く、宇佐宮社家も大友氏に対抗した。宇佐郡への対処のためにも大友氏は妙見岳城だけでなく、四日市切寄に比重を置き、検使・奉行を派遣したり、渡邊氏一族に宮成・益永・辛島の跡地を与えたりした。防衛的な意味を強め豊前国全体を見据えた支配拠点としての妙見岳城と、より地域的な支配拠点としての四日市切寄をもつて、さらにそれに準ずる形で尾長居切寄、下毛郡では賀来安芸守切寄を、国東郡では築地村切寄を、というように大友氏は反乱鎮圧への対処としてそれぞれの地域に拠点的意味を持たせる「切寄」を置いていた。妙見岳城を領国支配の中心に置き、地域拠点としての「切寄」を、さらに他の切寄で周辺を固めていくという、中世最末期における大友氏の境目地域における城郭編成の一つとして「切寄」という語が使用された。同族連合だけで切寄内の戦力人員が構成されるだけでなく、他の在地領主も籠ることもあり、大友氏は切寄間で在地領主を移動させるようなかたちで軍事編成を行い、「切寄」に公的性格を付与することで、妙見岳城の機能を補完する出城に編成され、大友氏によって在地領主を分断し寄せ集めることから「切寄」という語が生まれたといえる。

史料上では大友氏領国内での内乱に際して見られるだけでなく、島津氏の九州北部への侵攻の際にも見られることから大友氏の外敵防止策としても認識されるようになり、境目地域における大友氏の対策として存在し得た。島津氏領国内における「梶」と比較することで、戦国期に見られるその地域独特の城館に付随する城あるいは城的なものを示す用語は、戦国大名による境目地域への強化策としても存在したといえる。九州において戦国期にある一定地域にのみ見られる城館用語は、豊臣秀

吉の九州征伐を契機として見られなくなり、中近世移行期において戦国大名による領国支配・政策の内にも捉えられ、境目地域における重要拠点城郭と連動して存在していた。

境目地域における大友氏や島津氏の領国支配・政策との関連上に「切寄」や「柵」は存在し、境目の防衛としての機能を持ち、元々敵勢力であった在地領主(郡衆や土豪層)の再編を行う意味でも「切寄」や「柵」はあり、戦国期の中でも特に領国内での混乱が激化してきた時期にこそ、戦国大名支配の強化策として城郭の編成上に「切寄」や「柵」のような特殊な用語が使用された。

註

- (1) 村田修三氏は「城跡調査と戦国史研究」(『日本史研究』二二一号)において、大和国を事例に在地社会との関連性から述べている。
- (2) 阿蘇品保夫「文献に見られる九州の中世城郭」(『日本城郭大系』別巻一、新人物往来社、一九八二年)。
- (3) 阿蘇品保夫「切寄考」(『石人』二五七・二六〇・二六一号、熊本史談会、一九八一年)。乙咩政巳「中世末期から近世初頭にかけての城郭について―主として豊前国の場合―」(『大分県地方史』一三二号、一九八六年)。
- (4) 三重野誠「城誘に関する一分析―戦国末期の大友領国を中心として―」(『大分県地方史』一四三号、一九九一年)。同「戦国期における城誘―城誘に関する一分析その2―」(『大分県地方史』一八三号、二〇〇二年)。同「大名領国支配の構造」(校倉書房、二〇〇三年)。
- (5) 若山浩章「柵について」(『宮崎県地域史研究』二二・一三合併号、一九九九年)。また若山氏は戦国期日向を中心に見られる「水の手」と称されるものについても考察している(若山浩章「中世城郭の「水の手」をめぐって」『市史編さんだより 都城地域史研究』五、一九九九年)。

- (6) 『大分の中世城館 第三集 地名表・分布図編』(大分県教育委員会、二〇〇三年)。『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ 詳説編』(宮崎県教育委員会、一九九九年)。

- (7) 田北学編『増補訂正編年大友史料』(以下、『編大史』と略す)二四卷三二五号。
- (8) 『編大史』二四卷三五〇号。
- (9) 『編大史』二四卷三八六号。
- (10) 『編大史』二五卷二六〇号。
- (11) 「大友家文書録」『大分県史料』(以下、『大県史』と略す)三二卷。
天正九年十一月廿四日宗像氏貞感状案(『編大史』二二六卷二三三号)。
- (12) 『編大史』二六卷九四号。
- (13) 『上井寛兼日記』(大日本古記録)天正十四年九月一日条。
- (14) (天正十二年)十二月廿四日 大友府蘭書状(「大友松野文書」『大県史』二二五卷)。
- (15) 前註(4) 三重野氏論文・著書を参照。
- (16) 天正八年正月廿三日 大友義統書状写(大分県立歴史博物館所蔵城文書)。
- (17) (天正八年)九月廿日 大友義統感状(『編大史』二二五卷二六〇号)。
- (18) 三重野誠「検使政策による領国支配の転換」(前註(4) 著書を参照)。
- (19) (天正八年)十月十一日 大友義統感状(『編大史』二二五卷二七九号)。
- (20) 天正八年九月廿日 四日市切寄衆中給地坪付案(「大友家文書録」『大県史』三三卷)。
- (21) 『編大史』二六卷五八九号。
- (22) 『編大史』二六卷五九四号。
- (23) (天正八年)十二月九日 大友義統感状(『編大史』二二五卷三三七号)。
- (24) (天正八年)十二月九日 大友義統感状案(『編大史』二二五卷三三四号)。
- (25) 十二月十三日 田原親家感状案(『編大史』二二五卷三三六号)。

(27) 「天正八」八月廿八日 大友義統感状(『編大史』二五卷二二六号)。

(28) (天正八年)十月廿六日 大友義統書状案(『編大史』二五卷二九五号)。

(29) 当該期の古文書は二点。他は「上井覚兼日記」・「北郷忠相・忠相・時久三代日帳写」・「山本氏日記」(『鹿児島県史料 旧記雑録』(以下「旧記」と略す)後編一・二に所収)が中心となる。

(30) 『鹿児島の中世城館跡(鹿児島県埋蔵文化財調査報告書四三)』(鹿児島県教育委員会、一九八七年)。

(31) 前註(5) 若山氏論文の中で氏は「柵」の機能について①出城・付城としての柵、②籠を取り込む物構的な性格の下柵、③曲輪として本丸を守る柵(西柵)、というような柵の機能を指摘し、戦国期の城郭は「囲い込む」ことに特徴を持つとし、出城を意味する柵は境目という領土の一番外側の防衛線上にあり、領土を囲い取ることが柵の目的であったとしている。

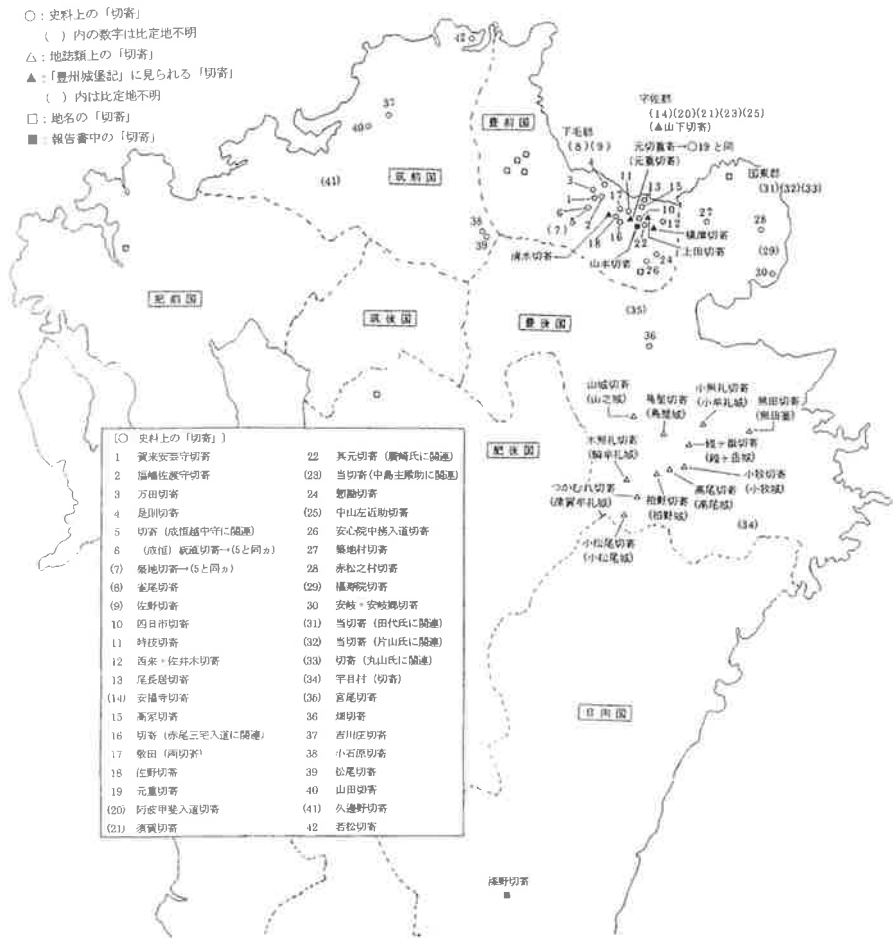
(32) 『山本氏日記』(『旧記』後編一)弘治三年正月条。

〔付記〕 本稿は、平成十五年一月に別府大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆・訂正したものである。

(大分市花津留二二二一八 ヴィルヌーブ四〇二)

【「切寄」分布図】

- ：史料上の「切寄」
 () 内の数字は比定地不明
- △：地誌類上の「切寄」
- ▲：『豊州城堡記』に見られる「切寄」
 () 内は比定地不明
- ：地名の「切寄」
- ：報告書中の「切寄」



○ 史料上の「切寄」	
1 黄米安宗守切寄	22 其元切寄 (廣嶋氏に關連)
2 福嶋佐渡守切寄	(23) 当切寄 (中島主殿物に關連)
3 万田切寄	24 郡殿切寄
4 足羽切寄	(25) 中山左近助切寄
5 切寄 (成程越中守に關連)	26 安心院中務入道切寄
6 (成程) 坂垣切寄→(Sと同カ)	27 築地村切寄
(7) 塚地切寄→(Sと同カ)	28 赤松之村切寄
(8) 釜尾切寄	(29) 福海院切寄
(9) 佐野切寄	30 安岐・安岐卿切寄
10 四日市切寄	(31) 当切寄 (田代氏に關連)
11 特伎切寄	(32) 当切寄 (片山氏に關連)
12 西米・佐井木切寄	(33) 切寄 (丸山氏に關連)
13 尾長谷切寄	(34) 平日村 (切寄)
(14) 安福寺切寄	(36) 宮尾切寄
15 高家切寄	36 堀切寄
16 切寄 (赤尾三宅入道に關連)	37 赤川庄切寄
17 飯田 (岡切寄)	38 小石原切寄
18 佐野切寄	39 比尾切寄
19 元重切寄	40 山田切寄
(20) 阿波甲斐入道切寄	(41) 久邊野切寄
(21) 須賀切寄	42 若松切寄